

「兄弟の難病治療に、受精卵診断で子を出産」の報道

先に当 HP（「雑学」バックナンバ - マスコミ等コメント関係（ ） P 2005. 3. 2. 「生命は授かるもの？選別して作るもの？」：参照）で、オ - ストラリアのドキュメンタリ - 番組の中で「難病を抱えている長男を治すには、遺伝子の適合する骨髄や臓器を移植するしかない。そこで、着床前診断によって受精卵を選別し、長男のドナ - となるべき「健康」な子どもを産むことを決断する夫婦」の話に触れた。

今朝の朝日新聞「第 2 社会面」8 段抜きで「難病治療めざし出産：母 2 人兄弟に骨髄移植へ ベルギ - ：受精卵診断で選別」の記事。

オ - ストラリアの番組は親の願いであったが、アメリカに続き、ベルギ - では実際に受精卵診断が治療目的で行われ、現に 2 人の母親がその目的として出産したということである。しかも、まだ一人は妊娠中、14 組のカップルに治療着手、61 組が順番待ちという（ベルギ - チ - ムも、アメリカチ - ムとの技術提携とか）。

もちろん倫理上の疑問が大きく絡んでくるからこそ、かなりの紙面を割いてまでの報道記事であり、現に識者のコメントも載ってはいるし、日本ではまだ行われていないことにも触れている。

世界の流れの常として、一旦こうした科学（医療）技術が開発され、世界のどこかで応用・実施されると、科学者の欲望として実施したくなるものであろう。「ユネスコの委員会では倫理上勧めず」ということのようなのだが、その内、世界の各国で次第に応用され出すと、報道も小さな紙面の報道になるような気がする。

つまり、我々の中での生命観、倫理観等々は、まだ十分に議論されていないような気がするだけに、倫理上の疑問がいつの間にか社会の片隅に追いやられるような気がしてならない。

人間としての尊厳やそれに伴う社会のあり方に関わる疑問を我々に投げかけてくれるのは、マスコミの責務でもあり、こうした生命倫理に関することは、世界の人類が共有すべき疑問・問題だけに、今後も検証記事を報道し続けて欲しいと願わずにはおれない。

生命現象そのものに、価値観という選別を持ち込んでいいのかどうか、いつの世も常に問い続けるべきことと思う。

（2005 年 5 月 22 日 記）